

教職大学院 Newsletter No. 156

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.2.18

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2022 VIRTUAL (Online) SPRING SESSIONS 特集号

実践し 省察する コミュニティ

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2022 Spring sessions

19(sat) 10:00-17:40
20(sun) 8:20-14:00

Cyber Space Co-inquiry and reflection with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師を支える教職大学院
教師の実践力を培う学校拠点の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2022.2.19-20

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科
共催 社会教育実践研究フォーラム
後援 福井県教育委員会

Cyber Space Co-inquiry and reflection with Zoom

内容

- 福井大学連合教職大学院のラウンドテーブルに寄せて (2)
- 全体スケジュール (3)
- 教職大学院改革特別フォーラム (4)
- ZoneA 学校 (5)
- ZoneB 教師教育 (6)
- ZoneC コミュニティ (7)
- ZoneD International (8)
- ZoneE 探究：学校新設!?プロジェクトをはじめよう (9)
- Round Table Cross Sessions (10)
- 実践し省察するコミュニティを結び支える (11)
- ラウンドテーブルの歩み (13)
- 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革
グローバルコミュニティへの誘い (15)
- アーカイブ (17)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2022年2月の開催をもって42回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、オンライン（Zoom）にてVIRTUAL (Online) SPRING SESSIONSを開催いたします。2月19日（土）には、教職大学院改革特別フォーラム、5つのテーマに即したZONE SESSIONS、2月20日（日）には小グループ（5名程度）で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

【Zoomを用いたオンラインのバーチャルセッションについて】

参加申込時の登録メールアドレス宛に以下の日程でご連絡差し上げます。

- (1) 2月18日（金）：2月19日（土）申込 ZONE ごとの Zoom URL をお知らせします。
- (2) 2月19日（土）：2月20日（日）ラウンドテーブルの Zoom URL をお知らせします。

*Zoom URL が未受信の場合には dptdfukui@yahoo.co.jp 宛に所属・氏名を添えてご連絡ください。

*両日ともに Zoom ブレイクアウトルームの設定がございますので、できるだけ「Zoom 接続開始」時間までに Zoom ミーティングに入室してください。運営サポートにご協力をお願いします。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

実践し省察する協働探究コミュニティとしてのラウンドテーブル

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

准教授 岸野 麻衣

2001年3月に始まったこの「実践研究福井ラウンドテーブル」。私が参加しはじめたのは、2007年3月でした。思い返せば当時、大学院の博士課程を修了したばかりで、4月に福井大学教職大学院の立ち上げに向けて着任予定でした。おそらく着任にあたって福井大学教職大学院の目指すところを共有しておくことをねらって参加を求められたのでしょう。私はわけもわからず参加したのです。今でも案内チラシを見た方から、「何をするのかがわかりにくい」という声を聞くことがありますが、私も同じ思いでした。どういう会なのだろう？と、頭の中ははてなマークいっぱいでもとりあえず参加しました。

今になって思うと、このわかりにくさは、いろいろな意味で境界のない集まりによるのでしょう。実践者と研究者。教科、校種、分野、領域。実践をめぐる集会はさまざまに存在しますが、それは特定の分野や領域の学会や研究会であったり、特定の校種での特定の教科にわかれての研究会であったりして、特定のコミュニティに閉じたものです。そこでは参加の対象や形・作法が確立していて、ある意味わかりやすいものです。それに対してこの「ラウンドテーブル」は立場や領域の境界を越えて、協働で「実践研究」に向かっていこうとするコミュニティであり、極めて創発的な場です。いまや、参加者は大人だけでなく幼児児童生徒にも拡がり、また国境も越えてグローバルに拡がっています。

実践者として経験を重ねて力量を培っていく過程では、それぞれが日々実践を捉え返し、また自分のコミュニティで語り合っ、いつのまにか経験知としていろいろなことが見えるようになったり、わかるようになったりしているものかもしれません。ラウンドテーブルでは、コミュニティの境界を越えて異質な他者と共に記録をもとに語り合い聴き合うことで、経験知となっていたことを掴みなおすことや自分のものの見方や考え方を捉えなおすことにつながります。実践の中から構造が見えてくればそれは理論にもつながっていきます。

多様な領域の省察的实践者が集い、「学ぶってどういうことなんだろう」「それを支えるにはどうしたらいいんだろう」「どうしたらより良く変えていけるんだろう」といった「正解」のない大きな問いに向けて、協働で探究していく過程がここに 있습니다。よくある、単一の講演会やシンポジウムに終わらない、とても複雑な構造の会ですが、問いをいろいろな角度から深めることができるに違いありません。二日終えた先に、世界の見え方が今までとは変わっている人もいれば、何も変わらない人もいることでしょう。探究には時間がつきものです。それでも、誰もがきっと何かしらの「驚き」に出会い、考えるきっかけを得られるのではないかと思います。参加者のみなさま、ようこそ実践し省察する協働探究コミュニティへ。充実した二日間になりますように。

実践研究 福井ラウンドテーブル 2022 Spring sessions

The 20th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

2/19(sat) 10:00-17:40 (zoom 接続開始 9:30)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 10:00-12:00
「新たな教師の学び」を支える協働のために

Session II 学校・教育・地域を考える5つのアプローチ 13:00-17:40

- A 学校: 21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
ー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探るー
- B 教師教育: 働き方改革と学び合う学校づくり
ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー
- C コミュニティ: 持続可能なコミュニティをコーディネートする
ーつどい、つながり、新しい価値をつぐむー
- D International: International Initiatives on Teacher Education Reform
Different Approach to 'Reflective Lesson Study'
- E 探究: 学校新設!? プロジェクトをはじめよう
ーけいけんをわかち合い、はっそうを飛ばすー

17:50-18:10 省察的実践学会総会

2/20(sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

7:50- 8:20	接続
8:30- 8:40	オリエンテーション
8:40- 9:00	自己紹介&アイスブレイク
9:00-10:40	報告 I
10:40-11:40	報告 II
～ランチ・ブレイク～	
12:20-14:00	報告 III

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。

言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。

話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。

2 / 19 (sat) 10:00-12:00 (zoom 接続開始 9:30)

教職大学院改革特別フォーラム

「新たな教師の学び」を支える協働のために

更新制講習以後の研修改革の展望をどう描くか

2021年11月15日に中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会から出された『「令和の日本型学校教育」を担う教師の学びの姿の実現に向けて（審議のまとめ）』において、教員免許更新制以後の教師の力量形成の新たなあり方、21世紀の教育改革を実現するための「新たな教師の学びの姿」、その視点・アプローチが「重要なメッセージ」として提示されている。

その重要な視点の一つが、「『主体的・対話的で深い学び』を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにもまた求められている命題である」という観点であり、そのこととも深く関わって、「一人一人の教師が、自らの専門職性を高めていく営みであると自覚しながら、誇りを持って主体的に研修に打ち込むことができる姿の実現を目指し」、「教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった『現場の経験』も含む学びの多様性を重視すること」、さらに、こうした学びを支える学校組織マネジメントの重要性が指摘されている。

今回の特別フォーラムでは、本『まとめ』の審議に深く関わり、研修改革の実現に向けて当事者として重要な役割を担っておられる方々に報告・提案をいただき、今後の教師の学びとそれを支える組織のあり方、そして教師教育改革や「理論と実践の融合・往還」を掲げて取り組んできた教職大学院が果たしていくべき役割と責任について、実践的な討議を進めていくこととしたい。

10:00 趣旨説明

10:05 情勢報告：教師の資質能力の向上をめぐる施策の動向（仮）

文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長 小畑 康生

10:20 実践的提案1：教師の主体的・対話的で深い学びとそれを支える研修の在り方（仮）

独立行政法人 教職員支援機構 理事長 荒瀬 克己

10:50 実践的提案2：今後の教員研修とそれを支える組織協働（仮）

福井大学 理事（企画戦略担当）・副学長 松木 健一

11:05 コメント・ディスカッション

福井県教育総合研究所 所長 北川 裕之

山口大学 教育学部 教授 和泉 研二

宮古島市立教育研究所 所長 平良 善信

11:35 コメントを踏まえて 報告・提案者による再定位

11:50 今後の展望・提案

福井大学大学院連合教職開発研究科長・教授 柳沢 昌一

〈司会〉

福井医療大学 保健医療学部 教授 寺岡 英男

福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 遠藤 貴広

（敬称略）

2/19(sat) 13:00-17:40 (zoom 接続開始 12:00)

学校・教育・地域を考える5つのアプローチ

Zone A 学校

21世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う

ー多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探るー

Zone A は、これまで(1)「専門職の学び合うコミュニティ (Professional Learning Communities)」を培う学校・園改革の在り方と(2)「多様な子どもたちの学びと育ちを支えるコミュニティ」を培う教育の在り方を検討してきました。そして、前回新たな取り組みとして、この二つのテーマを融合して実施しました。その中でも、「21世紀型の学びを支える教師の学習コミュニティを培う」というテーマを掲げて、学校や園が持続・発展していくための授業改革・教師協働の在り方や、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもがあるがままの存在として生き育つことのできる教育の在り方について議論を積み重ねてきました。そこでは、子どもがあらまの自分の自分を出せない難しい学校の状況があり、どの学校・教師も苦しさや辛さを抱えながら、時に重圧に押しつぶされそうになる実態の中で、また教師主導の授業から抜け出すことが難しいなどの悩みが共有されました。このような状況を踏まえつつ、教師間、子ども間、教師と子ども間の学習コミュニティの学びを深めていくためには対話や協働の在り方をもう一度見つめ直すことが重要である点を参加者とともに共有してきました。これらの視点は、教育・保育を考える上で極めて重要だと言えます。

そこで、実践研究福井ラウンドテーブル 2022 Spring Sessions では、引き続き同様のテーマのもと、一人一人の子どもが個性や能力を発揮し、学び合い育ち合う学校を実現するための「主体的・対話的で深い学び」をどうデザインすればよいのか、そのために教職員が協働していく組織をいかに構築していくのかについて、参加者のみなさまと共に協働探究し、対話や協働の質をいかに高めていくのかを検討したいと思います。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 オリエンテーション

Session I 13:10-15:10 Webinar Symposiums 「多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校づくり」

シンポジウム

13:10-14:00

<シンポジスト>

13:10-13:35 軽井沢風越学園

教 諭 片岡 利充

13:35-14:00 福井県立武生高等学校

教 諭 室井 浩貴

探究的な学習プロセスの中で、相互作用を通して子どもたちが学び合っていくストーリー、それを支える先生たちの組織・コミュニティについて話題提供を踏まえて考えていきます。

全体討議

<指定討論>

14:10-15:10

福井大学連合教職大学院

コーディネーターリサーチャー 牧田 秀昭

<コーディネーター>

福井大学連合教職大学院

准教授 宮下 正史

休憩

15:10-15:30

(敬称略)

Session II 15:30-17:00 Webinar Breakout Room 現状共有と明日への展望 Cross-session

Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式で対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

働き方改革と学び合う学校づくり

ー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー

今日の学校教育には、これからの変化の激しい時代において持続可能な社会の担い手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現など、教育の質的転換・向上が求められています。また、教員の大量退職や GIGA スクール構想の導入により、教員が互恵的に支え合う組織づくりも必要とされるなど、学校は大きな変革の中にあります。他方で、働き方改革も節目の時期を迎えています。こうした状況下で教育に携わる者の多くは、教育の質的向上と働き方改革とは一方を推進すれば他方が停滞するというディレンマに悩まされ続けているのではないのでしょうか。

Zone B「教師教育」では、現状を克服し、教育の質的向上と働き方改革との両立を目指して、自治体における具体的な事例なども踏まえながら、行事の精選や教員の会議の削減などに止まらず、働き方改革を実現しつつ教育の質的向上を図るためのカリキュラムマネジメントや教師が学び合うコミュニティとしての学校の在り方について展望を拓いていきます。

Society5.0 という社会を見据えて、学校という組織の新しい在り方を探り、協働する組織、学び合う組織としての学校づくりが求められています。今回の Zone B では、ICT を活用した学校内外における協働研究に取り組む若手教員の実践や、先進的に改革に取り組んでいる学校のこの 1 年の変化など、多様な実践を共有し共に考えていきたいと思ひます。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回もオンライン会議システム（Zoom）を用いて実施します。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:10 ガイダンス

Session I 13:10-15:20 **Symposium**

< 話題提供 >	福井県教育庁教職員課主任	刀裨 敬則
< 実践報告 >	福井県勝山市立鹿谷小学校教諭	寺島 亮太
	東京都千代田区立麹町中学校教諭	羽生 裕美
	福井県立敦賀高等学校長	山本 泰弘
< インタビュアー >	福井大学連合教職大学院教授	清川 亨
	福井大学教育学部助教	小林 溪太
< 進行 >	福井大学連合教職大学院教授	牧田 菊子
(敬称略)		

新しい学校の姿から、教育の質的向上や人材育成と働き方改革との両立を目指した実践を共有します。

Session II 15:20-17:00 Forums

実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の実践にどのように生かすことができるか、小グループで協議します。

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

一つどい、つながり、新しい価値をつむぐー

Zone C では、持続可能なコミュニティをコーディネートするというテーマで、地域の学習活動を支える公民館主事の方、地域の活性化に取り組む地域の方、そして地域と協働しながら教育活動を展開する教育関係者の方などが集いながら、シンポジウム等で対話を通じて長く探究を続けてきました。

前回までの話し合いのなかで、既存の方法では地域で起きている深刻な問題の解決に結びつかないという現実や、中央主導か伝統保守かといった二者に偏らないアプローチを模索することの必要性を確認してきました。私たちはコロナ禍において、持続可能なコミュニティをコーディネートすることの困難さや大切さに改めて直面していると言えます。コロナ禍でさらに地域に閉塞感が生まれるなか、若者や外部の視点を入れて地域を活性化させていこうという動きが出てきています。

例えば、学校現場においては、地域における課題解決に向けて児童・生徒が主体的に活動をし、学校と地域が一体となって展開する取り組みも進められています。また、人口が減少している地区に異なる視点を持った人たちが入り、その人たちをとりまくネットワークや取り組みが、地域への新たな価値や産業を生み出したりしています。

Zone C では、こうした取り組みを共有し、いかにつながり、つどい、新たな価値を紡いでいくことで、持続可能なコミュニティをコーディネートすることが出来るのか、そうした可能性について対話を通じて探ってみたいと思います。

Connection 12:00-13:00 接続

Orientation 13:00-13:15 主旨説明

Pre-session 13:15-13:30 自己紹介

Session I 13:30-14:40

学校を地域に開くということー社会教育の視点からー

話題提供：福井県立丸岡高等学校 峯森 一浩

コーディネーター：福井大学連合教職大学院：永谷 彰啓・水野 幸郎

14:40-14:50 休憩

14:50-15:00 全体共有

Session II 15:00-16:10

自伐型林業をフックにした「里山起業論」の実践事例

話題提供：一般社団法人こしのくに里山再生の会 松平 成史

コーディネーター：福井大学連合教職大学院：玉木 洋・半原 芳子

16:10-16:20 休憩

16:20-17:00 全体共有及び全体でのセッション

[全体ファシリテーター] (**Session I & II**)：福井大学連合教職大学院 富永 良史 (敬称略)

Zone D International

International Initiatives on Teacher Education Reform: Different Approaches to ‘Reflective Lesson Study’

The Fukui Roundtable is held bi-annually in February and June. In 2016, the United Graduate School of Teachers’ Professional Development, University of Fukui was commissioned to conduct JICA Knowledge Co-Creation Program (KCCP) on Lesson Study, and since then, we have continuously accepted requests for teacher training from Singapore, Thailand, Egypt, and Saudi Arabia. Given the above background, at the Fukui Roundtable in February 2021, we launched Zone D International to provide a forum for collaborative reflection on practices and future prospects for teacher education reform overseas.

In June, Zone D focused on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and followed the process of their reflective lesson study. We realized how crucial it is to work on it from a long-term perspective through practice and reflection. Therefore, in February, we will continuously follow the progress of their reflective lesson study practice.

This zone will consist of two sessions; symposium and “Roundtable”. In the symposium, the symposiast will discuss the approaches, results, and challenges of lesson study at Nalikule College of Education and its demonstration school. In the “Roundtable”, educators from other African countries who participated in JICA KCCP will share their reflective lesson study practice and learn from each other in small group discussions. We hope that the African example will stimulate you to reflect upon your own practices. These sessions will be conducted in English and translated to Japanese.

2021年6月のラウンドテーブルに引き続き、マラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及びその附属学校に着目し、省察的授業研究の取り組みの過程を追っていくことにします。今回のシンポジウムでも、ナリクレ教員養成大学及び附属学校における授業研究の取り組みや成果、課題等について話題を提供して頂きます。また **Session II Roundtable** では、JICA 課題別研修参加者の話題提供を踏まえ、参加者がそれぞれの校種や領域で具体的に実践を捉え直していきます。アフリカの事例を通して、各国での実践を捉えなおす場になればと思います。

なお、本セッションは全て英語で実施しますが、今回から試験的に通訳を行う予定です。通訳をご希望の参加者はパソコンやタブレット等、通訳用の Zoom に参加するためのデバイスを用意下さい。また、**Session II Roundtable** では通訳者数の関係から、通訳を希望される場合グループの人数が多くなる場合があります。

Session I 15:00-16:00 *Symposiums* Lesson Study in Nalikule College of Education and its Demonstration School

15:00-15:30 Presentation

15:30-15:45 Q & A

15:45-16:00 Comment

< Symposiast > Mr. Kondwani, Nalikule College of Education

< Coordinator > Ms. Wang Linfeng, University of Fukui

< Commentator > Mr. Takahiro Endo, University of Fukui

SessionII 16:00-18:00 *Roundtable* Sharing and learning from each other's practices in small group.

16:00-16:30 Practice Sharing from presenter 1

16:30-17:00 Group Discussion

17:00-17:30 Practice Sharing from presenter 2

17:30-18:00 Group Discussion

The following guest speakers are placed in each group.

Ms.MADEBO & Mr.TEFERA from Ethiopia

Ms.CHANYA, Mr.MWENELUPEMBE & Mr. Kondwani from Malawi

Ms.KALULE, Mr.MUDDE & Mr.NAMISI from Uganda

Ms. MOKOTJO from South Africa

Closing 18:00-18:10 Organizers

Remarks

Zone E ^{たんきゅう}探究

^{がっこうしんせつ}学校新設!? プロジェクトをはじめよう:けいけんをわかち^あ合い、はっそうを^と飛ばす

Zone E ^{たんきゅう}探究では「^{まな}学びと^{おし}教の^{あた}新しいすがたカタチ（ニューノーマル）」を^こ子どもたち・^{わかもの}若者たちと^{おとな}大人たちが^{せだい}世代を^こえて^{たんきゅう}探究してきています。今回のラウンドテーブルでは「^{あた}新しいプロジェクトをはじめる」を^{しゅだい}主題にして、（1）^こ子どもたち・^{わかもの}若者たちの^{あそ}遊び・^{まな}学び・^{たんきゅう}探究・プロジェクトのプレゼンテーション、（2）^{あた}新しいプロジェクトをはじめる^{わだいていきよう}話題提供と^{たいわ}対話、（3）^{しんせつがっこう}新設学校をつくろうワークショップ、の3つの^{きかく}企画をたてました。^{あそ}遊び・^{まな}学び・^{たんきゅう}探究・プロジェクトのけいけんをわかち^あ合い、みんなではっそうを^と飛ばしましょう！

2022年2月19日（土） オンライン Zoom

12:00 - 13:00 ^{うけつけ}受付

13:00 - 13:10 イントロダクション

13:10 - 14:15 ^{あそ}遊び・^{まな}学び・^{たんきゅう}探究・プロジェクト プレゼンテーション・ラウンドテーブル

14:30 - 15:40 ニュープロジェクトに^{ちようせん}挑戦する トピック・ダイアローグ

どうししゃちゅうがっこう
同志社中学校

けんちく まな
建築をいかした学び・プロジェクト

ふくいけんりつわかさこうこう
福井県立若狭高校

かいようがつか
海洋学科プロジェクト

16:00 - 17:40 ニュースクール 2030 ^{しんせつがっこう}新設学校をつくろう ワークショップ

☆プレゼンテーション・ラウンドテーブルで、^{あそ}遊びや^{まな}学びや^{たんきゅう}探究やプロジェクトを^{はつびよう}発表してくださる子どもたち・^{わかもの}若者たちを（^{おとな}大人たちも）^{ぼしゅう}募集しています。ご^{はつびよう}発表いただいた^{かた}方には^{ふくいだいがくだいがくいんはっこう}福井大学大学院発行^{はつびようにんていしょ}発表認定書^{おく}をお贈りいたします。

2/20

(sun) 8:20-14:00 (zoom 接続開始 7:50)

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

Round Table Cross Sessions

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聴き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

7:50- 8:30 接続

8:30- 8:40 オリエンテーション

ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。

8:40- 9:00 自己紹介&アイスブレイク

それぞれが今取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。

9:00-10:40 報告Ⅰ

10:40-11:40 報告Ⅱ

～ランチ・ブレイク～

12:20-14:00 報告Ⅲ

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたらと思います。

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える



2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を追走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする問い組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の

展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60・100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニューズレター』 No.11 2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2022.2

- 2001.3.17-18 春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして
木岡一明・寺岡英男（この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった）
- 2001.11.10-11 実践研究：福井ラウンドテーブル 省察的实践を支える協働（第 1 回）
For Reflective Practice、Professional Development、and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。（参加者 20 数名）京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
- 2002.3.16-17 実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志
フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
- 2002.7.13-14 実践研究：福井ラウンドテーブル（省察的实践を生み出す 学び合う組織を編む）（第 3 回）
- 2003.3.15-16 実践研究・事例研究ラウンドテーブル（第 4 回）
シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
- 2003.7.12-13 実践し省察するコミュニティ 実践研究：福井ラウンドテーブル（第 5 回）
- 2004.3.13-14 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル（第 6 回） 秋田喜代美ほか
- 2004.7.3-4 実践し省察するコミュニティ：実践研究福井ラウンドテーブル 2004（第 7 回）
2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる（於熱海～2009）
2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる（於早稲田大学）～現在に至る
- 2005.3.5-6 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 8 回 参加者 100 名超）
国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
- 2005.7.9-10 実践研究福井ラウンドテーブル 2005（第 9 回）
- 2006.3.4-5 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ（第 10 回）
田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
- 2006.7.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2006（第 11 回）三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2007.3.3-4 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 12 回）渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
- 2007.6.30-7.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2007（第 13 回）藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
- 2008.3.1-2 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 14 回）横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
- 2008.6.28-29 実践研究福井ラウンドテーブル 2008（第 15 回）人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
- 2009.2.28-3.1 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 16 回）稲垣忠彦
- 2009.6.27-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2009（第 17 回）5 つの領域：専門職として学び合うコミュニティ
（分野ごとのセッション始まる）
- 2010.2.27-28 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 18 回参加者 300 名前後）鈴木寛 Catherine Lewis
- 2010.6.26-27 実践研究福井ラウンドテーブル 2010（第 19 回）：学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
- 2011.2.26-27 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011（第 20 回 参加者 300 名を超える）門脇厚司・森透
- 2011.6.25-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2011（第 21 回）松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
- 2012.3.3-4 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions（第 22 回）（名称を変更する）

- 2012.6.23-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions (第 23 回) 参加者 450 名を超える
兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
- 2013.3.2-3 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions (第 24 回) 教師教育改革コラボレーションとの共催
- 2013.6.29-30 実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions (第 25 回)
11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013 winter sessions (明治大学)
2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム (宇都宮大学) 1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
- 2014.3.1-2 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回) 参加者 550 名を超える
- 2014.6.21-22 実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions (第 27 回)
11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
- 2015.2.27-3.1 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions (第 28 回) 参加者 700 名を超える
- 2015.6.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions (第 29 回)
11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.6 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、 2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、
2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2016.2.26-28 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions (第 30 回) 参加者 800 名を超える
生徒ポスターセッションを開催
- 2016.6.24-26 実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions (第 31 回) 参加者総数 547 名
7.8 記念講演&シンポジウム (和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル)
11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、 11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡 (静岡大学)
11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
- 2017.2.17-19 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions (第 32 回) 参加者 800 名を超える
特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
- 2017.6.23-25 実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions (第 33 回) 参加者総数 566 名
10.14 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.15-21 マラウイラウンドテーブル
11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、 11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学
12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル (明治大学)
- 2018.2.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions (第 34 回) 参加者総数 627 名
- 2018.6.22-24 実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions (第 35 回) 参加者総数 476 名
10.20 信州ラウンドテーブル (信州大学教育学部附属学校園)、 10.23 マラウイラウンドテーブル
11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、 11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良
12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学
12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル (東京学芸大学)
2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2019.2.15-17 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions (第 36 回) 参加者総数 930 名

- 2019.6.21-23 実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions（第 37 回）参加者総数 426 名
 9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、
 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 協働探究ラウンドテーブル in 奈良
 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル（明治大学）
 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
- 2020.2.15-16 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions（第 38 回）参加者総数 800 名程度
 3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
- 2020.6.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions（第 39 回）参加者総数 500 名程度
 11.21 東京サテライトラウンドテーブル
 11.21 ラウンドテーブル in 尼崎 2020（関西国際大学と連合教職大学院・奈良女子大学との共催）
- 2021.2.20-21 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions（第 40 回）参加者総数 550 名程度
- 2021.6.19-20 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions（第 41 回）参加者総数 560 名程度
 11.13 東京サテライトラウンドテーブル
 11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの^{いざな}誘い ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科教授 木村 優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びています。ラウンドテーブルの創生期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし

現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学（院）におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代（Society5.0）、超 AI 時代、VUCA²ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現す

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウェンガー・マクダーモット・スナイダー、2002）。

² 現代社会の特徴を表す 4 つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

るための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ(革新的)なローカル・コミュニティが集まる大きなコミュニティの「坩堝(るつぼ)」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション(解)」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュ

ニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院とJICAとの連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた(ピア)を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメン

バーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと(ショーン, 2017)。

Archive

—アーカイブ—

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2016 SpringSessions と、ラウンドテーブル 2018 Summer Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.84 (16.04.16) と No. 115 (18.10.13) からご紹介いたします。

Newsletter No.84 (16.04.16) より

久しぶりの福井で自身をふり返る

カリタス小学校 教諭 寺田 進

十年ぶりに福井大学を訪れた。前に訪れたのは真夏。本校（神奈川・カリタス小学校）が『総合教育活動』をスタートさせるにあたり、長野・伊那小学校からのご縁で松木先生にお会いし、そのご指導を仰ぐために同僚達と訪れたときだ。福井駅の改札を出ると松木先生が待っていてくださり、一緒にゲストハウスへ。のんびりする間もなく、すぐに研究会（検討会）が始まったのを覚えている。1泊2日という短期間だったが、中身の濃い、暑い（熱い）福井だった。

それ以来の福井。ラウンドテーブルの参加は初めてだ。あの十数年前と季節は違うが、やはり福井は熱かった。福井大学を中心として、「教育」を語る先生方の熱が高いことを感じた。

1日目の午後は Zone A に参加した。テーマは「校種を超えて教育を協働する」。幼保・小・中・高・大、さらに地域がいかに連携して子ども達の教育を協働するか。実践報告や語り合いの中で、「さて自分のところでは」と考える機会を頂けたと思う。

実践報告では和歌山県立桐蔭中・高等学校の取り組みと、長崎大学教育学部附属中学校の取り組みを伺うことができた。それぞれの学校の実践から学ばせて頂けることはたくさんあったが、どちらにも共通していることは「これでいいのだろうか？」と現状に疑問をもつことと、その疑問を解決するにあた

っては「構築の苦しみ」があるということかもしれない。よく「現状維持は退化に等しい」と言われる。日々、教育環境は変化している。変化している中で現状維持がよいはずもなく、私たちは進化・発展しなければならない。

そんな報告を受けて、自身ははたしてどうなのか？とふり返った。私の勤務する学園は幼稚園から高等学校まであるカトリックの一環校である。キリスト教という宗教を背景とした学園全体の理念は、共有されている。しかし、具体的な教育内容についてどうか？幼稚園のモンテッソーリ教育、小学校の総合教育活動、中高の進学実績を高める教育。こう眺めると、統一感、連携はなかなか見えてこない。福井周辺の公立学校の中でも、その連携が模索されているところがあるのを聞くと、本来「学園」として1つになりやすいはずのところ、それが機能できていないことにもっと問題意識をもたなければならぬと感じた。

幸い、昨年度から松木先生を学園講師としてお迎えし、今、その連携を構築していこうという雰囲気生まれつつある。まだまだ、校種間の文化の違いや考え方の違いが障害になることもある。でも、それを構築していく苦しみを経ないと新しいものは生み出されない。そんな思いを、福井での熱い先生との語りで感じさせられた。

ともに学び続ける

中国帰国者支援・交流センター 金井 淑子

福井ラウンドテーブルに初めて参加し、学生や若い世代の具体的な実践活動を知るよい機会となりました。中でも特に印象深かった「探求ネットワーク」について感想を述べます。

福井大学では、教育の一環として学生を県内の多様な場に派遣し、様々な活動を通して、学生を様々な人たちと向き合わせる「探求ネットワーク」と呼ぶ実践教育を行っています。そこでは活動の企画、運営その他の活動を、学生の自主判断に任せて進めています。

探求ネットワーク活動の一つで、附属特別支援学校で障害児を対象に行われている「ふれあいフレンドクラブ」の「ふれあいタイム」の活動では、学生のサポートの下で掃除屋、駅員、解体屋、ダンサー、画家などの仕事を児童にさせています。集団が苦手な児童をも考慮して活動は個別対応で行われていて、「ふれあいタイム」への不参加も認めています。仕事によって得た報酬を仕事をした児童に渡し、使途を児童の希望に任せていることが参加児童のモチベーションの向上に寄与していると思いました。学生たちは児童の自主性尊重を第一として様々な苦勞を重ねながら児童とのコミュニケーションに工夫をこらし、サポートを行っていることに感銘を受けました。

同じ探求ネットワークの「かみすき(紙漉き)」は、児童が紙を実際に漉き、できあがった紙で様々なものを作る活動で、作るものは児童の個性や自主性に任せて、参加児童の希望や考えに応じて変えていくようにしています。主に小学4～6年生を対象としているが、実際の参加者は小学1年から高校1年生まで広がっているそうです。参加者の弟妹や以前参加した児童が再度参加するリピーターがいるためです。リピーターが自然と新規参加者を指導するなど、

活動がよい方向に循環している様子がうかがわれました。参加児童の自主性を尊重して活動が進められていて、児童にとって活動自体が面白いことが、その理由のようです。スタッフの考えに固執せず、児童のアイデアを取り入れ、季節によって活動内容を変えたり班単位の作業を加えたりするなど、活動の目標設定などを試行錯誤しながら進めている。いずれの活動も活動内容を児童の自主性を重視して進めていることが成功の要点と思いました。



学ぶ人をリスペクトし、自主性を尊重することが最も重要であることを、私は長年にわたる地域の日本語教室におけるボランティア活動を通して実感してきました。Zone Cで報告されたどの活動も、活動の対象となる人の自主性を尊重し、上から目線でなく相手をリスペクトすることを大前提に進められていること、また、首都圏では退職後のシニア世代や子育て終了後の人たちによるボランティア活動が多い中、若い人たちによる様々な活動の状況を知ることができ、ボランティア活動の広がり、前進を感じることができて勇気づけられ、私にとって有意義な機会でした。

ラウンドテーブルに参加して

板橋区立赤塚第二中学校 学校地域ボランティア 染宮 利章

初めに、福井大学院の木村先生・半原先生そして赤塚二中校長宮澤先生には、ラウンドテーブルの参加の機会を頂きました事にこの書面をもって感謝の意を表します。

Zone C2では、地域と学校はいかに学び合うのかという議題の中、フォーラムの際に福井大学生の実践研究発表と至民中サポーターの活動報告を拝聴いたしました。

ここで気付いた点は二点あります。

まず、福井は福井大学を中核とする学びのコミュニティが充実している点です。東京には多くの大学が存在しますが、残念ながら同様の体制を構築する事は現状不可能でしょう。様々なことが東京は大きすぎ、多すぎます。福井は地方都市の利点を最大限生かしていると感じました。二つ目は環境の違いからくる文化の多様性を実感した点です。福井の公民館制度は大変機能していると思いましたが、東京にはどう当てはめていくのかは、今後模索しなければならない課題でしょう。

さて、ここで小職の活動に関して少々記します。

数少ない東京区部の中で、所有農地を活動拠点として、赤塚二中学生に野菜収穫させそのまま給食食材として納品、翌日の給食となり食すという一連の流れを体験させ、納品作業には金銭が発生する事を伝え経済活動であることも意識させます。しかし常に疑問を持ち続けている事があります。赤塚二中学生を取り巻く環境は、福井とは全く異なり、近隣には無限の飲食・ファーストフード店舗が乱立し、蛇口や手動スイッチすら存在しないフルオートの新築マンションが多々存在します。その環境に育つ彼等は、果たして農業体験など単に授業の延長的位置づけであり、

その域を超えていないのではないか、という点です。あまりに生活とかけ離れすぎていると思えるのです。

教育の詰込型から創造発想型への転換と言う観点から確かにこの活動が有意義であろう事は理解できます。しかし学問水準が高度な生徒は、物事を第三者視線で捉えることが一度で可能でしょうが、一時の体験で実学探究を汲み取れない生徒は長期に亘って体験させなければなりません。小職単独では数的限度があり、時間的制約の中での限界を痛感します。

東京で行うことの意義をどう捉え直し、学校側への後方支援にどう直結させるか。介入しすぎず、しかし待つだけではなく程良い距離感を保ち、推進させるか。教えることは教えられることの基本概念を自らも再探究し、生徒たちにバーチャルではない行為行動から得られる体験を通し、利便すぎる東京で育つ彼等にその特異性を理解させてゆく事こそ真の教育と言えるのではないかとこのラウンドテーブルで再認識いたしました。

現在、赤塚二中は、福井市の至民中や安居中との交流を大切にしている学校文化があります。この交流は永遠に続けて欲しい活動です。文化的価値観の違いを持つ同世代の交流により、相互に感じ取らせる事こそ我が活動における最大最高の源泉であるからに他ならないからです。

Newsletter No.115 (18.10.13) より

実践研究福井ラウンドテーブルに参加して

福井医療短期大学 看護学科 大口二美

私は、長年の病院での臨床実践および看護管理を経て、看護師をめざす学生への教育に8年前から携わっています。この間、将来一人一人が主体的に学びつづけ患者に寄り添い、患者の中に潜む生きようとする力を引き出し、また医療がすべての効力を失ったあとも患者と共にあり、患者の生きる日々の体験を意味あるように助ける看護が提供できる専門職業人をめざして卒業してもらいたいと思い教職に就いています。しかし、年々、社会情勢の変化とともに、若者の変化に驚き悩むこともあり、看護本来の姿と看護実践を結びつけるための教授方法を模索している中で、森透先生から「実践研究福井ラウンドテーブル2018」のご案内をいただきました。今までに看護基礎教育に関する研修として、公益社団法人福井県

看護協会が主催する看護基礎教育検討委員会の企画で、福井県内の看護基礎教育を担う教員を対象にした講演や意見交換の研修会に参加していましたが、省察的实践者の教育というのはどういう内容かを学びたく研修会に参加しました。

Session I ポスター発表 Students' Poster Session で、小学生が個々に工夫し課題発表を行い、その発表に対して中学生がしっかりとした視点で助言等をおこなっている生徒ポスター発表を見ました。先輩が後輩を育成している姿は頼もしささえ感じ、このような子供たちが将来、大学へ入学することを考えると、学生同士での学びと自主性を尊重した学

習方法が身につけている学生の力を活かした教授方法を再検討する必要があると思いました。

次に、ラウンドテーブルの【ZoneB2】「これからの教員養成を学部・大学院を通して考えるー実践を聴き、夢を語るー」に参加しました。私のグループメンバーは大学院での教員養成に関わられている教員や院生、中学の先生や大学教育学部附属中学校の副校長と様々な立場にある方がメンバーでした。まずは、福井大学連合教職大学院の先生から事例報告がなされ、インナーメンタルの形成を主に学生の教職課程の構築とその試みと成果の報告がありました。その後のグループ討議で、人を対象とする専門職である教員

や看護師を育成する教育者は、その教科の専門性と教科教育法の実践的な力量の形成が重要であると学びました。また、他のメンバーから教職課程を学ぶ学生の中にコミュニケーションスキルの形成が必要な学生がいること、教育実習を受け入れる側の先生からは、教師像のない学生が実習に来ており、日々実習が苦痛のように見える等の意見があり、看護学生に関する悩みや課題と同じものだなと思いました。

省察的实践者の教育という点では、十分に理解できたかは疑問ですが、インナーメンタル形成や教育法の実践的な力量の形成の重要性、そして人を対象とする専門職業人の育成への悩みや課題は教員教育や看護師教育においても同じものであるなど、学びが多いラウンドテーブルでした。

このような有意義な場にお誘いいただいた森透先生に感謝申し上げますとともに、関係者の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

福井ラウンドテーブルに参加して

岡山市教育委員会事務局学校教育部指導課人権教育室 重森しおり

私は、「福井ラウンドテーブル」の大ファンの一人だと自負している。ファンと言うと軽い感じがするかもしれないが、ここへ寄せてもらう意義は計り知れないと思っていて、毎回、岡山から数人が参加させてもらっている。そんな思いを抱えつつ、今回初めて6月にあるラウンドテーブルに参加させていただいた。

1日目は「コミュニティ」の分科会で、「つながりの編み直しを支える」をテーマに語り合った。初めに事務局の半原さんから提起された「『コミュニティ』の捉え方の違い」が、とても興味深く、コミュニティの網の目は、そこに集う人の意思や思いで強くなることも弱くなってしまうこともあり、その中で編み直しを支えていくのだ、ということを再認識させてもらった。それをベースとして、今回もポスターセッションが、かなり充実していた。大学生を中心とした活動紹介の後、参加者との質疑・応答が行われるのだが、大人たちからのどのような問いに対しても、学生自身の活動への自負や思いと共に語られていたのが印象的だった。これまで先輩たちが培ってきたものや、前年、前々年の活動の積み重ねの上に、現在の活

動が位置づけられ、その関わりの中で起こる学生さんや参加者の変容について考察することができた。その後のパネルディスカッションでの議論も様々な立場からの発言で刺激的であった。

2日目は、グループに分かれてのラウンドテーブルで、私はあるグループのファシリテーターとして参加させてもらった。3名の方から発表をいただいた。お一人目が教員の方。お二人目は学生さん。三人目は県外から参加の教員の方。

毎回のことだが、バックグラウンドも現在の職責も異なっている5人で実践を省察するわけだが、あっという間の5時間だった。ファシリテーターが指名しなくても、聞きたいことや語りたいことが、それぞれから溢れていた。

同じ教員という立場でも、視点やアプローチの仕方は異なり、学生や社会教育だとなおのことであるが、実践者から教えてもらうわけでも、誰かが教え諭すわけでもなく、実践を共に考え深め合い、時には批判的に実践を見つめ合う時間が今回も続いた。

社会教育現場が長かった私にとっては、学校現場に関わっている方との対話はとても刺激をもらう。他では味わうことのできない醍醐味の一つとっている。特に、学校現場での「その人自身が考え、行動していく」そのための、教員の関わりや問いかけに気づかされることが多い。逆に、様々な年齢や人生を歩んできた人が暮らす「地域」での多様性が少しでも共有できていたら、私が参加している意味もあるかと思う。

今回は実践を語る立場でも、聞き役でもなかったが、他者の実践を自分の文脈にどう置き換えるか、自分の資質にどう転換するかを自然と意識して聴いていた。それは、あの空間の成せる妙だと思う。改めて、「問い」から始まる掘り起しや気づきの奥深さを体感させてもらった。

「共に生きる」ことを支えるコミュニティを支える

省察的実践の取り組みから学ぶ

西東京市田無公民館・公民館専門員 鈴木麻里

『生産性』があるかないかで人を仕分ける」という考え方が蔓延している世の中において、「共に生きる」ということを、多様な人々と共に考えていくことが本当に必要だ。そのためのヒントを、実践研究 福井ラウンドテーブル Zone C コミュニティ分科会で発表された杉本博氏（社会福祉法人光道園理事）からたくさんいただいた。

光道園とは、昭和 32 年に自らも全盲という障害を持つ初代園長中道益平氏により創設された身体障害者更生施設で、昭和 41 年には日本初の盲重複障害者のための重度身体障害者授産施設を開設。創設 60 年の現在も「光道園精神」が継承、実践されているという。それは「人を人として尊敬すること」「いかなる人間であっても、必ずやその一人ひとりの中にすばらしい長所があるはず、障害をもった人達の体内に必ず可能性があるはず、その可能性を求めて歩み続けてほしい」という創設者の思いであり、その思いをつないでいくために、35 年以上にわたり毎年「重複障害講座」「生活支援事例報告会」が開かれ、450 事例を超える実践研究記録としてまとめられているという。

その実践記録の中の 1 冊『施設で生きる 省察的実践者が育つコミュニティを創る』（※1）によると、「重複障害講座」に参加する職員は、綴られた事例を読み、1 年後にはひとりの利用者について自分の実践を書き上げる。そこでは利用者の「問題行動」を判別・診断し矯正・治療し解決するため

ではなく、利用者の思いを理解し共に生きていくための手立てを見つけていくような実践が求められている。さらに、事例は、利用者を実践者である「自分」と切り離して、客観的な対象として記述するのではなく、「利用者」と「自分」と「両者が生きる生活世界」との三項関係の中で記述する。従って事例の対象は利用者だけでなく、筆者である「自分」が含まれており、「自分」がよりよく共に生きるための実践でもあり、職員としての当事者研究でもあるという。

私は 2013 年に西東京市保谷駅前公民館に配属になり、若者の生きづらさ、働きづらさをテーマにした講座を担当してきた。それらの講座から立ち上がったサークルでは、ひきこもっている子どもを持つ親御さんや精神障がいの方など様々な生きづらさを抱える市民が主体となり、地域活動を展開している。

2018 年に田無公民館に異動になり、「8050 (7040) 問題」といわれるひきこもりの長期化、高齢化の問題をテーマに講座「地域から“孤立”をなくすヒント」を実施した。また、障がい者学級「あめんぼ青年教室」の担当として、月 4 回、知的障がいのある 20 代～60 代の学級生と一緒に活動している。

上記の実践も含め、今までに 5 回ほど、実践記録をまとめる機会があった。福井から帰る電車の中でこの本を読みつつ、自分が今まで書いてきた実践記録は、＜「利用者」と「自分」と「両者が生

きる生活世界」との三項関係の中で記述する>ことができていたのだろうか、という考えが頭の中をぐるぐる駆け巡った。この本の正直に、率直に書かれた文章に衝撃を受け、その実践が35年も前から繰り返され蓄積されてきたという学びの厚みに衝撃を受けた。

そして<「利用者」と「自分」と「両者が生きる生活世界」との三項関係の中で記述する>という実践があるからこそ、「共に生きる」ことができるのではないかと、私の中で点と点が一本の線につながったように感じた。

杉本博氏の発表の終盤、光道園で亡くなられた、お二人の盲ろう障害者の方に対して「光道園で満足できる生活を送っていただけたでしょうか？」と問われた言葉に心揺さぶられ、子ども時代のことを思い出した。

私の実家は地方都市で三代続いたクリーニング店で、郊外に工場を建て機械化されるまで、クリーニング店2階の住居を仕切って、住み込みの従業員が暮らしていた。高度成長時代、深夜労働は当たり前で、当時10歳ぐらいだった私も家事労働の担い手として、小学校から帰ると毎日6合～8合の米を研ぐのが役目だった。住み込みの従業員のうち二人は聴覚障害者の男性で、午後3時の休憩時間に、ソファに座って手話で楽しそうにやり取りしている光景を覚えている。二人以外の従業員のほとんどは私の母の妹たちが結婚するまでの一時手伝いに来ていて、休みの日にみんなで卓球をするのが楽しみだった。

聴覚障害のある従業員の一人Yさんは、工場勤務となったタイミングで結婚し家庭を持った。もう一人のMさんは近所にアパートを借り、実家の一階にある店舗に残った。私は18歳で上京したため詳しくは知らないが、Mさんは家族との交流がほとんどなく、飲酒などの影響からか入退院を繰り返し、最期は私の父が看取ったと聞いた。Yさんに比べ、Mさんは可哀想な人生だったと私は勝手に決めつけていた。

しかし、杉本氏のお話で、私の中にも『生産性』があるかないかで人を仕分ける」という偏見があると気づかされたのだ。Mさんは、家庭はなかったが入退院を繰り返しつつもつながりのあった父に看取られた。当時の卓球台は、今は弟の家にあり、私の家族が帰省したとき卓球をしながら、Mさんの思い出が語られることもある。

「障害をもった人達の体内に必ず可能性があるはず、その可能性を求めて歩み続ける」という光道園の精神に学ばなければならないことは、まだまだたくさんあると感じている。

参考文献：

※1『施設で生きる 省察的实践者が育つコミュニティを創る』社会福祉法人光道園 編 川島書店 2017年。

※ご所属は当時のものです。

